との關係を推測するを得るやうである。即ち西域水道記によると、徐松がこゝに行つた時に、「彼土耆土趙吉云、乾隆癸卯歳、巖畔沙中、掘二得斷碑一、有レ文云、秦建元二年、沙門樂僔立、旋爲二沙所レ沒」と見えて居る。これは必ずしも千佛洞の創始を樂僔に歸すべき據と爲すには足りないが、果して之が眞實ならば少くとも建元二年といふ時代に於て、樂僔と千佛洞との間に關係の存したことを示すには、屈强の材料である。それで從來は此等の碑文の示す處に從つて、何人も千佛洞の起源を此の時代と此の人とに置くことに於て疑を有するものは無かつたやうに思ふ。然るにペリオ氏が此の一洞中から得た多くの文書の中に、前後の殘缺した、沙州即ち敦煌地方の地志の斷簡があつて、今氏のこゝから蒐集した漢文書中の第 2691 として、巴里の Bibliothèque nationale に藏せられてゐるが、その第一行から次の行にかけて

令（？）時窟宇並已矗、新（？）從二永和八年癸丑歳叛建レ窟、至二今大漢乾祐二年己酉歳一、竿二得五伯玖拾陸年

記一の文句がある。此の記事が敦煌の千佛洞に關するものであることは、書物の性質上からも疑ふべき餘地はない。それで之によると始めて千佛洞の窟が作られたのは、東晋の永和八年癸丑の歳の事となる。併しながら永和八年は實は癸丑では無くして壬子の歳に當り、癸丑は王羲之等の蘭亭の會によつて有名な翌永和九年に相當する。この間の矛盾は次に記されて居る五代の漢の乾祐二年（949 A. D.）から逆算して見れば訂される譯で、この年から五百九十六年を遡ると、實に癸丑の歳永和九年（353 A. D.）に當り八は九の誤と見なければならぬ。そうして東晋の永和九年は、北方に於てはこの前僅か二年に長安に據つて國を建てた前秦の苻健の皇始三年、姑臧に據つた前涼張重華の永樂八年で、敦煌の地方はまだ前涼の勢力の下に在つた時代である。